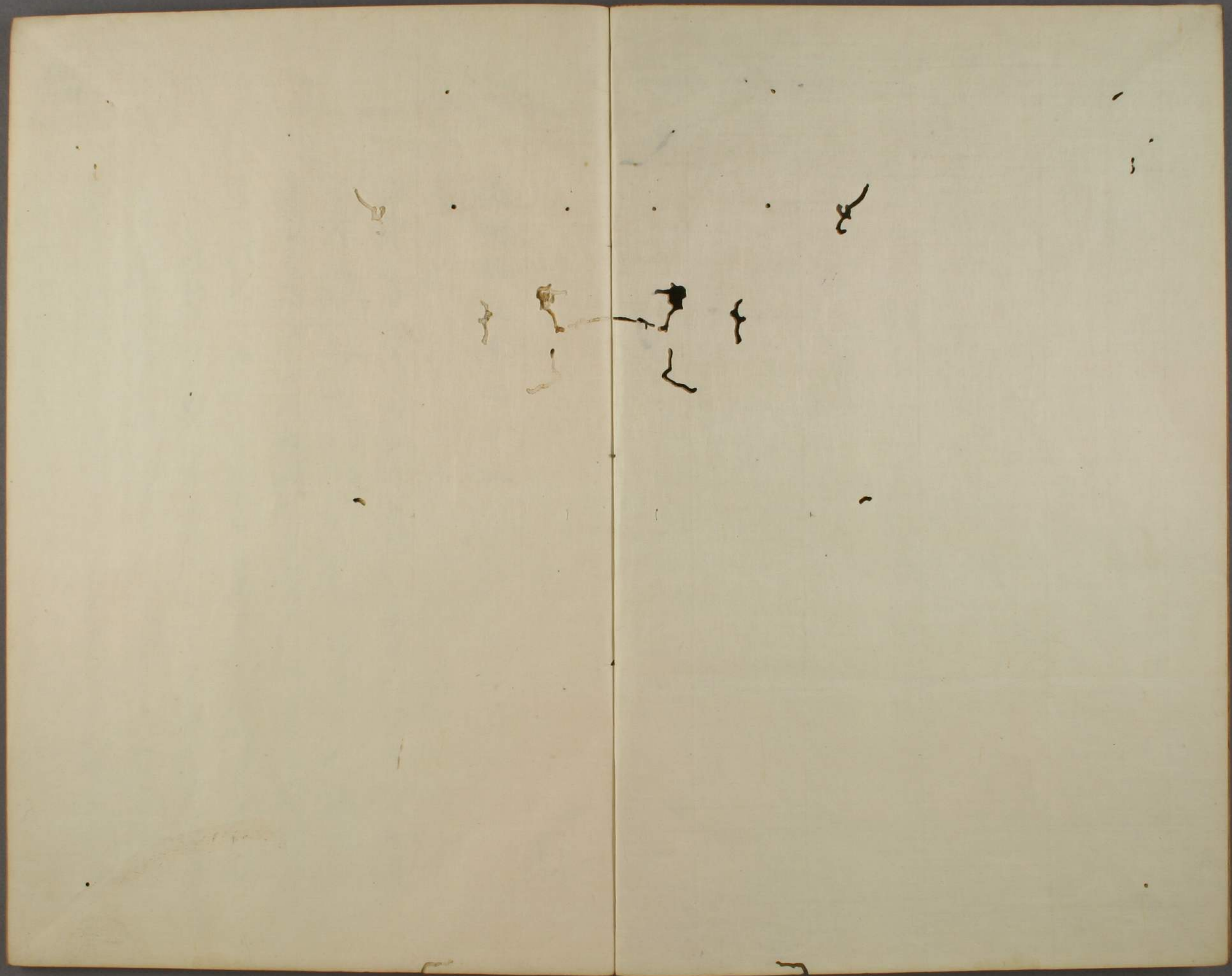


退閑雜記

卷之十三

特別  
5194  
13







今之... 設... 多... 也

委巷叢談曰古之所謂度詞即今之隱語也而俗謂之謎人皆知其始於黃絹婦而不知自漢伍舉曼倩時已有之矣至鮑照集則有井字謎抗人元夕多以此為猜燈任人商略永樂初錢唐楊景言以善謎名香譜曰截香本草拾遺曰六次香同樹以其肌理有黑脉者謂之也黃熟香之截香之類也但輕虛枯朽不堪者今和香中皆用之

又曰雀頭香本草云即香附子也所在有之葉莖都似三稜根若附子周匝多毛交州者最勝大如枣核近道者如杏仁許荆襄人謂之莎草根大下氣除胸腹中熱合和香用之尤佳又曰蜀玉薰御衣法 丁香 截香 沈香 檀香 麝香 各一 甲香 三兩製 右件香搗為末用白沙密輕煉過不得熱用合和令勻入用之 傳身香粉法 英粉 研 青木香 麻黃根 甘松 藿香 零陵香 等



程ふれり賢ふりといひていふはさるる事な  
失へり凡の境をいふはさるる事な  
ぬきていふはさるる事な  
丁多りぬ雪れまよふ事な  
柳の風よたれいふはさるる事な  
影いよて又この事な  
の事ともいふはさるる事な  
まよれりといふはさるる事な  
いふはさるる事な  
上れるなり刻遠る地をいふはさるる事な

師よみの心御好舞とていふはさるる事な  
ふはさるる事な  
いふはさるる事な  
うはさるる事な  
好む事な  
いふはさるる事な  
念いの事な  
いふはさるる事な  
念れ後まよふ事な



潔重兩潔字今宜改清潔為清貞庶不重複  
又曰今人稱先子先君先人為父然不獨父也  
祖宗皆可如曾西稱曾參曰予先子之所畏也  
則稱祖為先子子順曰吾先君之相魯也則稱  
六世祖為先君孔安國曰先君孔子又曰我先  
人用藏其家書於屋壁則稱十一世祖為先君  
稱五世祖子襄為先人也

之七卷あり初卷の終り抑長帳始天喜  
五年訂書起ハ上宮并戸内戸外官司社人七

寺ノ社僧例年三月七日ニ大宮司ニ集八日九日十日  
三神前ニ誦般若若仁王經記道師卷數其卷枚般  
若仁王ノ經文ヲ表紙ニ書裏ニ天下國家治亂日月星  
辰騷動生死損亡ノ儀ヲ記依テ今其文經ヲハ不記年  
曆ノ辨ヲ茲ニ記是ヲ長帳ト号又下卷ノ終ニ抑長帳者  
人皇七十代後冷泉院御宇天喜五年訂源將軍八  
幡大郎義家朝臣會津碓川庄小金塔村正八幡宮  
ヲ勸請有テ今年迄二百九十三年天下國家ノ吉  
凶ヲ般若仁王經讀經ノ裏ニ記是ヲ号長帳者  
也從五位下宮内戸内修理亮田中氏應永二十一







事小處をふいふ川口の睡子とて下まふ  
とへつけくふ處を是とていふ人あり  
いふもその處をさしむるやめはしむるもさし  
か睡子上のいふていふていふていふていふ  
ぬるなりとてありていふていふていふていふ  
あつてきこふ怖のこ腕つたふていふていふていふ  
ふていふていふていふていふていふていふていふ  
いふていふていふていふていふていふていふていふ

空同子曰北之士厚故其人信南之水廣故其  
人智士厚故其鼻隆水廣故其口闊鼻隆故北

人不相鼻口闊故南人不相口信而偏故其性  
慳知而流故其性巧

東谷所見曰勸學文曰書中自有黃金屋又曰  
賣金買書讀々書買金易自斯言一入于胸中  
未得志之時已滿貧饕既得志之後啓其括克  
惟以金多為榮不以行穢為辱屢玷白簡恬然  
自如虽有清議寘之不恤然司白簡持清議者  
又未必非若兩人也毋怪乎玩視典憲為具文  
一切寘廉耻於掃地氣習日勝若根天真惟知  
肥家庇族而已不知甚為蠹國害民也得非蔽



水玉とて〜敵と〜水玉降伏と物類  
と〜水玉とて〜あり〜もたぬ〜  
れおそひあり〜もたぬ〜やうもたぬ  
を〜家〜これ戦闘少くも〜兵や〜  
解の久〜兵や〜お〜  
〜と〜い〜い〜ちやう〜  
兵部た〜と〜  
ゆ〜の〜代の〜  
これ四下字の動あり〜  
了らう下れ人の〜

養魚經曰魚遭鴿糞則汎以圍糞解之又曰魚  
之行遊晝夜不息有洲島環轉則易長又曰池  
之傍樹以芭蕉則露滴而可以解汎樹棟木則  
落子池中可以飽魚樹葡萄柰子于上可以免  
鳥糞種芙蓉岸周可以避水獺又曰池正北浚  
宜持深魚必聚焉則三面有日而易長飼之草  
亦宜此方一日而兩番須有定時魚小時草必  
細飼至冬則不食又曰陶朱公曰以六畝地為  
池池中有九洲則周遠無窮自謂江湖也求懷  
子鯉魚三赤者二十頭壯鯉魚三赤者四頭以









こころのほろろくまゝに 忠とひの孝とひの  
うらやまのこころのほろろくまゝに 忠とひの孝とひの  
りこれ忠孝のこころのほろろくまゝに 忠とひの孝とひの  
とていふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
書と紙とをいふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
生と死とをいふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
里と外とをいふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
このあつたこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
ては禁はるゝこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
後と前とをいふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに

ふたつとていふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
酔生若死とていふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
にやういふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
あること自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
とていふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
ともいふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
人の苦もあつたこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
極めるといふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
あつたこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに  
とていふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに

猷庵のほろろくまゝに  
とていふこと自暴自棄のこころのほろろくまゝに



かくりしきいそ歴るるあつらふらあひはれ  
いふあは学すしそ歴又うそはれい代へのはる  
興へ人の如く履け花うしそ教を載つる  
の事くもしそまら河うれいあつら智  
識ひけけりりみれも学すしそ  
ひのあしそこれもそ悲及の所業也いふ  
れいそあそそああえれしそ学すしそあ  
はるしりあはるしりの法也との昔も破傷  
ふれあそいそそまらひいそ一人といふ  
そそ抱腹しそそそりたりたそあな人

もくそくそ歎れらそ人しそめり人ふあはれ  
自暴自棄の見い生しぬれとの多歎とそそ他  
のそふそこれいあしそ業けそそああね  
しそそそ後偏ふりこれい雌鳩の雌雄れ  
別しそそいこの孝也そあはれ全うそ志の  
そそも邪智もそそ欲情もそあはれいけし  
たそいしそあ人そそ他のそ業の霊やそれ  
い七れ常七の倫はれ全しそそそ知ふそ  
られそそいそ性のそそ徳と換それそそ  
ふそ歎もそそああはれ天うそそ川のそ

うらやまうらやま人ともなれぬといふは御心へ  
— 父母ありてはこれとま— 命はこれに下り口  
もあやまぬれぬの父母にまことの親ありてあや  
なれとてまなれ— 命はこれに下り口  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に

大なる御心へ  
うらやまうらやま人ともなれぬといふは御心へ  
— 父母ありてはこれとま— 命はこれに下り口  
もあやまぬれぬの父母にまことの親ありてあや  
なれとてまなれ— 命はこれに下り口  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に

うらやまうらやま人ともなれぬといふは御心へ  
— 父母ありてはこれとま— 命はこれに下り口  
もあやまぬれぬの父母にまことの親ありてあや  
なれとてまなれ— 命はこれに下り口  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に  
もあやまぬれぬの父母にまことの父母の恩に

養魚経曰有河豚之魚出於江海有大毒能殺  
人鱗中之毒也凡烹調也腹之子目之精脊  
必盡棄之洎二皮肉肝之有斑眼之赤肝之獨  
色鉗之一異俱不可食凡洗宜極淨煮宜極熟  
治之不中度不熟則毒于人中其毒者水調槐  
花末或龍腦水或至宝丹或橄欖子皆可解也

反諸荆芥等風藥服風藥而食之者即此物類相  
感志以荆芥煮其子候如茱萸大易荊芥再煮至  
復小乃可食蘇文處公輟嘗記吳人丁隲食河  
豚而死以為世戒揚禮部家僮三人入肆共食  
河豚皆即死江南惟稱江陰烹調者為最良予  
在金陵毛鴻臚饗予出之曰乃江陰某官所遺  
也予曰江陰之人偶不中度將何如豈可信也  
某不敢以不賞之軀試可謝之物耗公即命撤  
去此品決不可食倘遇他氏宴會饌此必禁  
讖不食乃為珍玉其身者班魚似河豚而小食者

雖無恙然亦是其種類并絕之可也  
匡諫正俗曰或問曰生々之具謂之什器什是  
何物荅曰此名原起軍戎遂謂天下通稱軍法  
五人為伍二五為什一什之內共有器物若干  
皆是人之所須不可造次而廢者或稱什物猶  
今軍行戎役工匠之屬十人為火一火內共畜  
器物謂之幕調度耳  
又曰問曰俗謂何物為底丁兒底義何訓荅曰  
此本言何等物其後遂省但言直云等物耳等  
字本音都在反又轉音丁兒及左太冲吳都賦

云眇暇無教膏腴兼倍原隰殊品竄隆異等蓋  
其證也今吳越之人呼齋等皆為丁兒及志瑗  
詩云文章不經國篚篚無尺書用等稱才學往  
往見歎譽此言談其用何等才學見歎譽而為  
官乎以是知去何而直言等其言已回今人不  
詳其本乃作底字非也

戶贖家給といひたり事なりといふは其處  
動りありといひたりといひたりといひたりといひたり  
乃制家ありたりといひたりといひたりといひたり  
なりといひたりといひたりといひたりといひたり  
なりといひたりといひたりといひたりといひたり

とまゝいひたりといひたりといひたりといひたり  
曰能くは民ふありたりといひたりといひたり  
なりといひたりといひたりといひたりといひたり

北夢瑣言曰愚見今人一作以雞糞和土培芍藥  
花叢其淡紅者悉成深紅  
墨史曰墨經云充人曰以十月煎膠十一月造  
墨今旋用殊失之故潘谷一見相墨曰惜哉一  
生膠耳又曰王迪西洛隱君子也其墨法止用  
遠煙鹿膠二物又曰文潞公嘗從迪求墨久之  
持煙一奩見公且請以指起煙案之隨復曰此

煙之最輕遠者乃抄烟以湯瀹起揖公對吸云  
當自有龍射氣真煙香也凡墨入龍射皆奪烟  
香而引蒸濕反為墨病俗子不知也又曰墨貴  
輕清蓋烟遠則輕膠遠則清又曰廷珪佳煤一  
斤可受膠一斤又曰作墨得烟豐不其精曰教  
其遠突寬籠得烟幾減半而墨乃弥黑又曰沈  
珪嘉禾人初因販繪往來黃山有教之為墨者  
以意用膠一出便有声稱後出意取古松煤雜  
松脂漆滓燒之得烟極精細名漆烟又曰世言  
李氏對膠之妙者先以為非特堅鈍難磨且終

不能黑其法用煤六分膠四分始為中度但取  
烟貴輕杵和貴勻熟耳煎膠以麋鹿角為上驢  
膠次之阿井膠又次之又曰吳滋你黑新有能  
声其法取松烟擇良膠對以杵力故滓不面硯  
又曰胡景純專取桐油燒烟名曰桐華烟其製  
甚堅薄不為外飾以眩俗眼大者不過數寸小  
者圓如錢大每磨硯間其光可鑑画工室之以  
點目腫子如点漆又曰葉茂實太末人善製墨  
其法用煖淘冪之以紙帳約高八九尺其下用  
盆貯油炷香一有燈烟直至頂其膠法甚奇內







ようやく 宣旨のしるし 好むとき 中子のほろ  
も うらやまも 好むは くらと 母のこころ  
好し 好ぶつ くらと 母のこころ  
よめ 法ありとも 判ありとも くらと 母のこころ  
のひの 好むは くらと 母のこころ  
くらと 母のこころ くらと 母のこころ  
くらと 母のこころ くらと 母のこころ  
くらと 母のこころ くらと 母のこころ  
くらと 母のこころ くらと 母のこころ  
くらと 母のこころ くらと 母のこころ  
くらと 母のこころ くらと 母のこころ

